

(茨城県)

霞ヶ浦に臨み筑波山を遠望する田園都市 未来投資戦略で誇りの持てるまちを実現

表玄関の《自由通路》が開く 多彩な可能性

かすみがうら市ルポの取材は、昨年3月に一部供用開始、今春から全面供用が開始されたJ R常磐線・神立駅^{かんだう}の橋上駅舎および東西自由通路の見学からスタートした。

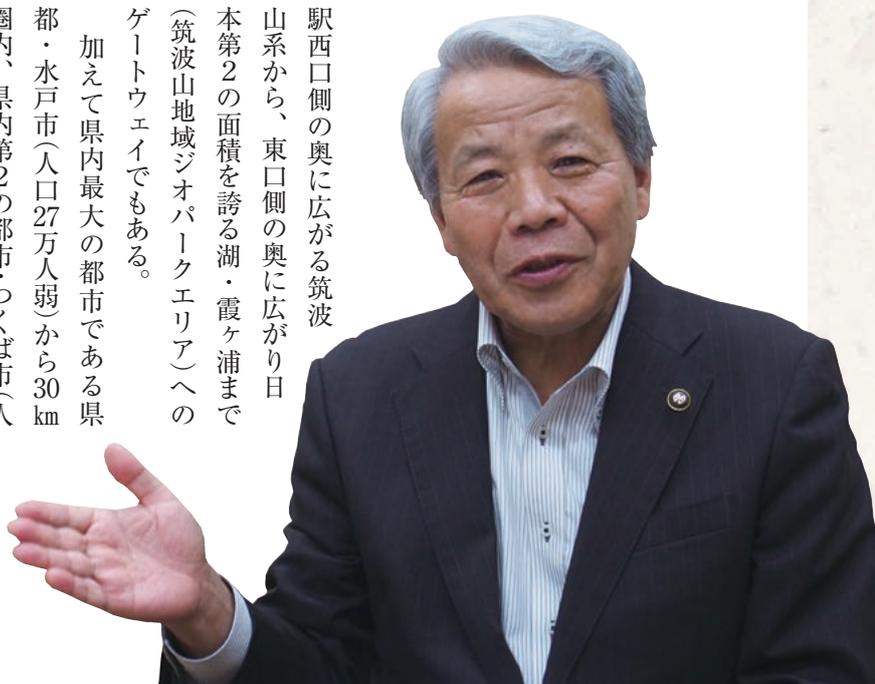
平成17年3月、かすみがうら市は旧霞ヶ浦町と旧千代田町の2町合併で誕生した。新市の市域(156.6km²)は、J R常磐線を境にほぼその東側(霞ヶ浦方面)が旧霞ヶ浦町地区、西側(筑波山系方面)が旧千代田町地区に区分できる。旧霞ヶ浦町も旧千代田町も旧村時代の明治28年に神立駅が設置されて以来、合併に至るまで共に100年以上、最寄り駅としてきた経緯がある。神立駅は近代以降では最も歴史の古い、地域交通インフラの核なのだ。

それだけに一層、合併から足かけ15年にわ

たり、両地区の一体的な振興を多角的に図ってきたかすみがうら市にとって、両地区を結ぶ拠点・神立駅の東西自由通路の完成は待望久しいエポックとなった。その効果は実際、旧霞ヶ浦町地区と旧千代田町地区の一体化や交流がさらに進展する、というだけにとどまらない。

全面バリアフリー化が施された真新しい橋上駅舎の完成は、かすみがうら市のシンボルとしての表玄関が、多様に再構築されたことを意味する。

折しも取材時には、地域の次代を担う幼稚園の子どもたちが次々と改札口を通り、ホームに待機していた団体臨時列車に乗り込んでいく光景が見られた。子どもたちは東京近郊の動物園へ遠足に行くことになっていたので。このように、地域の東西一体化をより進めるための核となる新・神立駅は、それ以前に《上野東京ライン》を通じて東京と約90分で結ばれるプラットフォームである。さらに神立



つばいとおる
坪井透
かすみがうら市長

駅西口側の奥に広がる筑波山系から、東口側の奥に広がり日本第2の面積を誇る湖・霞ヶ浦まで(筑波山地域ジオパークエリア)へのゲートウェイでもある。

加えて県内最大の都市である県都・水戸市(人口27万人弱)から30km圏内、県内第2の都市・つくば市(人口約24万人/筑波研究学園都市)の中心部から10km圏内、東京都心部からも70km圏内に位置するかすみがうら市は、常磐自動車道(千代田石岡IC)や国道6号線、354号



橋上化工事が完了し、本年3月に全面供用開始となったJR神立駅(上)
遠足の幼稚園児でにぎわう東西自由通路(下)

線などの幹線道路網によっても、周辺各地と緊密に結ばれている。まさに交通の要衝といっている。

そんな充実した交通インフラ全体の核としての存在感も、新・神立駅にはある。例えば神立駅を中心とするエリアは、東口側も西口側も、首都圏近郊で近年人気の住宅街を形成している。かすみがうら市の人口密集地は稲吉地区・稲吉東地区・稲吉南地区・上稲吉地区・下稲吉地区・新治地区・宍倉地区などだが、その多くは神立駅周辺に集中しているのだ。同時に西口側の最奥部に当たる筑波山系の山麓部から展開する広大なエリアは、かすみ



霞ヶ浦に近いエリアで栽培される全国区ブランドのレンコン

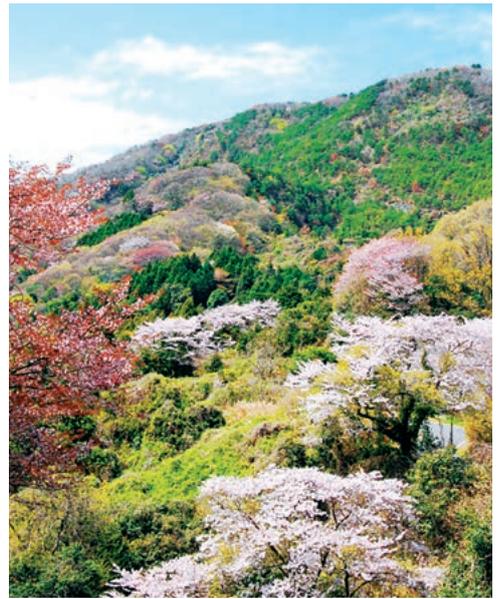
がうら市の地場産業の一つ、梨・栗・柿・ぶどう・イチゴなどの名産品を生み出す果樹園が数多く立地している。東口側の霞ヶ浦に近いエリアには、全国区ブランドとして有名なレンコンの農地が、沿岸部を中心としたエリアには、霞ヶ浦名産のワカサギやシラウオ、川エビの加工場などが、それぞれ随所にある。こうした自然環境の豊かさや、



「神立駅の橋上駅舎化と東西自由通路の設置は、かすみがうら市と土浦市の連携(土浦・かすみがうら土地区画整理一部事務組合)による、一連の整備事業の一環です。神立駅は実は、隣接の土浦市の市域に位置

自然の恵みを楽しめるまちづくり

レベルの高い食の生産エリアとしても知られる神立駅の東西両地区には、四季折々、首都圏はもちろん、国内外からの旅行者が訪れる。表玄関としての新・神立駅は今後、観光交流面での強力なプラットフォームの役割を、これまで以上に果たしていくことも期待される。そして取材時(6月下旬)には、神立駅西口側の自由通路から、表玄関としての神立駅を持つ多様な効果や可能性をさらに促進する都市計画道路(神立停車場線)の建設が進展している様子を見ることができた。



霞ヶ浦とは全く異なる自然環境が展開する雪入山からの風景(筑波山地域ジオパークエリア)

しています。土浦市とかすみがうら市の両市にまたがる形での日常的な生活圏が、神立駅周辺では形成されているわけですが、定期的な利用者の多くはかすみがうら市民という特徴があります。そのため、神立駅のリニューアルやそれに付随しての各種整備事業などについては、土浦市やJR東日本のご理解、ご協力を得た上での連携による実施が、絶対的な前提条件でした。

そこで平成17年の合併および新市誕生以来、かすみがうら市では市民の一体化や全市の一体的な振興に不可欠な神立駅とその周辺の再整備に向け、土浦市とJR東日本との綿密な協議を繰り返してまいりました。都市計画道路の建設が佳境を迎えていることで、それが現在、ようやく最後の仕上げの段階に到達しようとしているわけです」

「晴れ晴れとした表情でそう語る坪井透かすみがうら市長は、旧千代田町生まれ。家業の

農業に従事しつつ、千代田町議・茨城県議を経て、合併翌年の平成18年にかすみがうら市第2代市長に就任した。かすみがうら市発足の足かけ15年間の歩みのうち、今年で計3期目10年間にわたり、市政をけん引してきた。それだけに「神立駅と周辺地域の整備事業はまさに宿願の一つでした」と語る口調は熱い。神立駅西口側で現在進められている都市計画道路は、全長2.3km。駅前広場の予定地に直接的につながる280mほどは土浦市の市域で、土浦市が主体に工事を実施している。その先のかすみがうら市の市域部分(約2km超)は、かすみがうら市が主体となって進めている(着工は平成28年度で、今年3月から一部供用開始)。

「神立駅西口前の都市計画道路は、これまで駅前から大きく迂回しなければ到達しなかった国道6号線に、駅前からほぼ一直線につながっています。市街地の主要幹線道路として位置付けており、市民生活の一層の向上や、今後の市内経済活動の持続的な発展および防災に不可欠な《都市施設》としても期待しています」(坪井市長)

この都市計画道路は神立駅前から、かすみがうら市域内の人口密集エリアである稲吉地域を突っ切るような形で国道6号線に達する。国道6号線はさらに常磐自動車道の千代田・石岡IC、土浦北ICとも至近距離でつながっている。そのため新・神立駅は自動車交通における高速交通網とも密接なつながり



土浦市との連携で進捗する都市計画道路建設(一部供用が開始)

を持つことになる。

かすみがうら市域にはこれまで再三述べてきたように、筑波山系の山並みがあり、東端には日本第2の面積を誇る霞ヶ浦を有しており、ジオパークにも指定されたエリアとなっている。この「山と湖」に挟まれたエリアからは数々の名産品が生み出されており、地域ブランド《湖山の宝》として全国発信されている(詳細は後述)。

こうした環境そのものが、まさにかすみがうら市の地域財産であるわけだが、それらはいわばソフト的な要件と、都市施設としての神立駅、6号線などの幹線国道、常磐自動車道などのハード的な要件が、新・神立駅の完成と2.3kmの都市計画道路によって有機的

(茨城県)



かすみがうら未来づくりカンパニーが運営する地場産品のマルシェ（かすみがうら市交流センター、1F同フロアにはレンタサイクルコーナー、2Fにはレストラン）

かすみがうら市における地域ブランディング

新たな魅力を付加する ブランディング戦略

に関連付けられようとしている。そして計り知れない多様性と可能性に満ちた《面的効果》を生み出そうとしているのだ。

坪井市長は本年度の施政方針において、筑波山地域ジオパークと霞ヶ浦の有機的な活用と発信を軸にした、「自然の恵みを享受できるまちづくりの促進」を重点施策の一つとして挙げている。そのキーポイントにもなりそうな神立駅西口側の都市計画道路の全面供用開始は、今年度中に予定されている。



地域ブランド「湖山の宝」として認定された推奨品

グのキーワードは《湖山の宝》だ。この地域ブランドとして推奨・発信するために考案されたネーミングは、かすみがうら市ブランド化推進協議会において、市内産の農水産物やその加工品（6次製品）の中から推奨品を認定し、湖山の宝推奨品として表示することで差別化を図るために活用されているのだ。

同時にかすみがうら市の特徴を一言でイメージ喚起できる、ブランディングネームともいえる。筑波山系から霞ヶ浦に臨む特色豊かな地域内において、育まれてきたいろいろな意味での《土地柄》を表す言葉としても印象的で覚えやすい。



筑波山系に近いエリアに数多く立地する果樹園は市場からも観光客からも大人気

「それらの多彩な農水産業を活用したサイクリングプログラムを中心とした体験型観光事業や、地産地消をコンセプトとしたレストラン事業、6次産業化などを推進するため、

地域ブランドとしての《湖山の宝》推奨品は、本年4月の時点で計41品が認定されている。目を引くのは地元産の原材料の多彩さだ。栗、梨、ブルーベリー、サツマイモ、米、落花生、レンコン、ワカサギ、シラウオ、川エビなど、まさに山・里・湖（元々汽水湖でもあった霞ヶ浦では現在も約50種の魚介を産出）の多彩な幸が、ふんだんに使用されているのだ。



日本中のサイクリストが集う《かすみがうらエンデューロ》(毎年10月)



視覚障害者からも人気が高い《かすみがうらマラソン》(毎年4月)

行政や金融機関、地域資源活用プログラム等
 開発事業の計画策定に協力した民間事業者
 (株式会社ステッチ)との連携により出資し、
 平成28年に共同設立したのが、《株式会社か
 すみがうら未来づくりカンパニー》です。現
 在、霞ヶ浦沿岸に設置した《かすみがうら市
 交流センター》での地場産の農水産品を活用
 したレストラン運営事業(かすみキッチン)、
 物販のマルシェ事業(かすみマルシェ)、交流

拡大していくことが期待されます。同時にこ
 うした事業の推進を通じて、地域の特徴を生
 かしたアグリビジネスの推進だけでなく、ゆ
 くゆくは地域未来投資促進法にも基づいた、
 新たな価値と地域力の創出を促進するような
 役割も担ってほしいですね。
 特に生産に積極的に取り組む農業従事者の
 育成、地域経済を将来的に担っていただけ
 るような事業者の育成にもつながっていき

センターを起点
 にした各種サイ
 クリングプログ
 ラムの企画運営
 (地産フルーツを
 テーマとしたラ
 イドクエストの
 開催、各種イベ
 ント企画立案・
 実施、メンテナ
 ンス体制の拡充、
 レンタサイクル
 事業など)をはじ
 め、さまざまな
 事業を実践して
 います。
 今後はさらに、
 市内の農水産物
 や6次製品の販
 路を県内外、ま
 たは海外にまで

考えています」(坪井市長)
 かすみがうら未来づくりカンパニーの設立
 は平成28年。市長の言葉にもあるように、レ
 ストラン事業や物販事業とともに、当初から
 霞ヶ浦の環境を生かしたサイクリングプログ
 ラムの企画運営にも力を入れてきたのが特徴
 的だ。
 昨年7月、かすみがうら市は筑波山や霞ヶ
 浦とその周辺の自然環境を活用した全長
 180kmの「つくば霞ヶ浦りんりんロード」の
 沿線14都市の一員として、民間企業などの
 共同で組織する「つくば霞ヶ浦りんりんロ
 ード活用推進協議会」に参画した。これは昨
 年6月に国が策定した「自転車活用推進計画」
 を受けた事業の一環でもあるが、かすみがう
 ら未来づくりカンパニーの取り組みを見ても
 分かるように、「つくば霞ヶ浦りんりんロ
 ード」および自転車を活用したまちづくりにお
 いては、かすみがうら市は周辺都市とともに、
 全国的に見ても先進自治体の一つといえる。
 中でも毎年10月に開催される《かすみがう
 らエンデューロ》は霞ヶ浦沿いの景観を楽し
 みながら走れる、全国のサイクリストにも人
 気の高い公道使用の耐久レース(コースは1
 周4・8km)だ。初心者からプロ級レーサーま
 でが幅広く楽しめる《かすみがうらエン
 デューロ》のコンセプトは、毎年4月に開催
 される《かすみがうらマラソン》とも共通点
 が多い。

《かすみがうらマラソン》は視覚障害者の参

(茨城県)



霞ヶ浦と周辺の人々との共生が改めて確認された世界湖沼会議(昨年10月)

湖山の宝を軸とする未来投資戦略

加も可能な本格的レースを実現している。参加者の幅の広さと、参加者や環境にやさしいコンセプトの徹底ぶりには、《かすみがうらエンデューロ》と同様、常に参加者からの称賛が寄せられている。

両者はそういう意味で、全国に情報発信して知名度向上を図れる強力なコンテンツになっているといえるだろう。

昨年10月、かすみがうら市をはじめ周辺6市町も共催者に名を連ねた《第17回世界湖沼

会議》が霞ヶ浦周辺エリアで開催された。その大会テーマは「人と湖沼の共生―持続可能な生態系サービスを目指して―」というものだった。

「人と湖沼の共生」という意味では、霞ヶ浦は昔から常に周辺地域の人々に恵みをもたらしてくれる存在でした。以前は汽水湖だったため、淡水魚も海水魚も獲れる豊かな湖で、霞ヶ浦の名物ともいえる帆引き船は風力を活用した環境にも非常にやさしい漁船でした。その発祥の地はかすみがうら市で、発案者は折本良平さん(1834〜1912年)です。



沿岸と網で繋がれ、風力だけで進む霞ヶ浦名物・帆引き船

霞ヶ浦は農業用水や工業用水への利用などの理由から海へ通じる水門が閉じられ、汽水湖ではなくなりましたが、ワカサギやシラウオをはじめ今でも多くの魚種が獲れ、あるいは養殖され、その加工品はまさに《湖山の宝》の中心を成すものです。

霞ヶ浦で主流とされてきた伝統漁法の帆引き網漁を行う帆引き船の姿は、今でも観光帆引き船として見学することができます。時代とともに動力船が主流となった現在、この漁法を今に伝える漁師さんもだいたい減りました。しかし、人と湖との持続可能な関係を考える上で環境にもやさしく、景観的にも優れた帆引き船は、まさに霞ヶ浦とその周辺に暮らす人々との共生のシンボルのような存在だと考えています(坪井市長)

冒頭で述べたように、かすみがうら市の都市的な発展は、交通インフラのさらなる拡充などにより、着々と進んでいる。

全国共通の少子高齢化、人口減少などの課題は、そんなかすみがうら市にとっても不可避の課題として目の前に存在する。

しかし《湖山》が織りなす素晴らしい自然環境に育まれた数々の《宝》を軸とする、かすみがうら市の多彩な未来投資戦略は、筑波山や霞ヶ浦から朝夕に吹き渡る爽やかな風をはらんでいるかのように、明日への希望に満ちたものに映る。これからの推移にさらに注目していきたい。

(取材・文〓遠藤隆／取材日令和元年6月21日)